

妙心寺の塔頭にみる障壁画構成の傾向

山岡 泰造

現存する妙心寺関係の障壁画では、靈雲院や龍安寺のものが古く、いずれも細川氏関連のもので、幕府画師の狩野元信を主宰者として制作された。その前後の状況は判然としないが、これらの作品が後世の障壁画に何らかの影響を与えたことは推測される。天文頃とされる靈雲院は、礼の間・室中・檀那の間に山水・花鳥・人物を配し、書院・眠藏・衣鉢の間に山水・花鳥・山水人物を配し、檀那の間の人物（琴棋書画）は真体（夏珪様あるいは馬遠様）、室中の花鳥は行体（牧谿様）、書院の山水は草体（玉泓様）である。元信の作品でこれに先行する大仙院では、礼の間・室中・檀那の間を、人物（四季耕作図）・山水・花鳥とし、書院・衣鉢の間に人物（唐人物）・人物（禅宗祖師）を配する。室中の山水は水墨画の名手相阿弥が行体（牧谿様）で画き、他はいずれも狩野派で真体で画く。これは元信をはじめとする狩野派が、未だ水墨画に習熟していなかったのではないかと思われる。大仙院の主題の構成は「蔭桜軒日録」延徳三年（一四九二）の条に見える相国寺雲頂院中の松泉軒のものに似ている可能性がある。礼の間・室中・檀那の間が、不明・山水・花鳥であり、他の二つの書院が山水・人物ではないかと推測される。室中の山水が孫君澤様、檀那の間の花鳥は、日本人の画家で雪舟の師である天章周文の筆様で画かれ、一つの書院が山水（瀟湘八景）で夏珪様である。延徳二年（一四九一）の作とされる大徳寺真珠庵は、周文系の

画家と推定される作品が三室分あり、室中が花鳥、他の二室が山水で、花鳥は牧谿様、山水は夏珪様と玉泓様で、真行草の三体が揃っている。これらからみると、靈雲院障壁画は真・行・草の三体あるいはそれらに適合する中国画家の筆様を意識して画いており、室町時代の伝統を踏襲している。因みに靈雲院室中の行体花鳥図は、元信の孫の永徳に受け継がれ、大徳寺聚光院の室中においてより緊密な構成を示し、それが信長・秀吉時代の特色となる金地彩色の巨大草木花鳥画へと発展したのである。

妙心寺退蔵院方丈の南側三室は渡辺了慶によって慶長七年に画かれたと考えられるが、三室とも山水と山水人物で、室中は西湖図、檀那の間は谿谿訪戴図である。これは靈雲院の衣鉢の間の西湖・谿谿訪戴図を二室に分けたといえる。退蔵院にはもと元信の障壁画があったとも推測される。

妙心寺天球院の障壁画は狩野山雪が寛永八年（一七三一）以後に画いたものである。まず仏間に金地彩色で松を画き、南側三室は金地彩色で花鳥・動物（竹虎）・草花を画き、北側二室は水墨画で山水人物である。この構成は画期的である。

聖澤院客殿の障壁画は元禄十五年（一七〇二）に片山尚景が画いている。南側三室の主題は、花鳥・動物（獅子）・山水、北側二室は人物（十牛図）・花鳥であるが、すべて水墨画で真・行・草の区別は分明でない。

春浦院方丈は南側三室に山水・花鳥・人物を画き、元禄以後、山口雪溪によって画かれた。水墨画で真・行・草の区別はない。

春光院客殿は狩野永岳の筆と推定され、南側三室に人物・花鳥・花鳥、北側二室に花鳥・人物を配する。いずれも金地彩色で表現上の区別がなく、室中に芦雁図を配するなど、主題的にも特別な配慮があるようにも思えない。

大雄院方丈は四条派の柴田是真の筆に成り、上述の諸例が狩野派あるいは狩野派系の画家の手に成るのと対蹠的である。制作時期は天保四年（一八三三）頃と推定され、柴田是真筆であるが、その前身のものは不明であり、是真のものとの関係は不明である。南側は着色の草花、淡彩の人物（郭子儀）、水墨の山水、北側の水墨の稚松と水墨の猿と狸であるが、主題も技法も深い配慮がなされているように思えない。四条派の表現で統一され、流派の画風を強く打ち出している。障壁画は単に流派の画風を専用する場となった。

妙心寺の塔頭には客殿（方丈）のほかに、書院がある二室構成で、客殿よりも時代の下るものである。聖澤院の書院には、狩野典信が一間に麒麟、二の間に竹林七賢を画き、春光院の書院には、狩野洞玉が小書院十二畳の間と隣室の茶間（元来は両室合わせて十四畳の間）に山水・花鳥を画き、書院には上の間に武陵桃源図、下の間に山水を画き、大雄院の書院には土岐済美が二室ともに山水を画く。書院においては二室間に主題の相異がある場合でも、表現技法や表現様式に変化をつけることなく、水墨画で地味な表現をとっている。書院と客殿とは障壁画の構成方法に相違があるようである。